

中学校におけるメンタルヘルス尺度の構成の試み —スクールカウンセラー活動の一環として—

鈴木 美樹江

目次

- I. 問題と目的
- II. 方法
 - 1. 調査対象者
 - 2. 調査手続き
 - 3. 調査内容
- III. 結果
 - 1. 因子分析結果
 - 2. 学年、性別による検討
 - 3. メンタルヘルス調査の有効性に関する検討
- IV. 考察
 - 1. 性別差に関する検討
 - 2. メンタルヘルス調査の有効性についての検討
 - 3. S.Cがメンタルヘルス調査を取ることの意義
 - 4. 今後の課題

I. 問題と目的

2020年には、世界で神経精神医学的な障害を持つ子どもの数は約50%以上増加し、世界における児童青年時代の疾病率、死亡率、障害率の5大原因のひとつとして、神経精神医学的障害が挙げられるようになるとの危惧が出ている [1]。米国ではこのような問題に対応すべくして、学校で予防的取り組みが推し進められてきた [2] [3]。

そもそも予防的取り組みとしては、一般的に以下の3段階に分けて捉えられている。まず1次予防で、問題が起こる前の一般の人々に対して介入を行うこと。2次予防は、本格的な病気となる前段階に働きかけること。3次予防とは、障害や問題が蔓延し、深化するのを抑える働きである。Mrazek & Haggerty (1994) は、本格的な病気となる前に働きかけることを薦めている。つまり、1次予防や2次予防に働きかけることの重要性を指摘しているのである [4]。

実際に、177の1次予防プログラムを再調査した研究においては、1次予防プログラムに参加した人は、していない統制群に比べて、59%~82%上回る成績結果となったとの報告がある [5]。また、130の第2次予防プログラムについても評価した結果、行動的介入や認知行動的な介入を受けている参加者の平均値は、受けていない統制群と比べて、約70%成績が上回っていたとの指摘が出されている [6]。これは、今後臨床的な病気をもつ可能性が高い子どもたちを早期に発見し、行動的・認知行動的なプログラムを行うことは、臨床的な症状をもつ子どもたちの精神療法と同じくらい効果があることを意味している。

具体的には米国の学校場面における予防プログラムで代表的なプログラムとして、Cowen, E.L. (1980) のPrimary Mental Health Project (以下PMHPとする) がある [7]。PMHPにおける2次予防とし

ては、深刻な情緒的な問題に発展する危険がある子どもを査定するためにスクリーニング調査を行い、学校場面での早期発見・対処を可能とした。このプログラムの特徴的な側面としては、学校場面での生徒の適応危機の早期サインを発見するために、Child Rating Scale (以下CRS) という質問紙調査を用いた点があげられる。

このように2次予防においては、登校しているものの、学校不適応感や学校回避感情を抱える「グレーゾーン」の子どもをいかに早期に発見し、対応するかが重要である [8] [9]。そしてグレーゾーンの生徒を早期に発見し理解するためには、質問紙調査の重要性が指摘されている [10]。近年、わが国においても2次予防の一環として、学校適応尺度等が開発されてきている [11] [12]。実際に、学校適応尺度の一つである学校生活満足度尺度の結果と欠席行動との関連について検討を行った調査では、学校生活不満足が高い生徒は有意に欠席行動が多かったことが指摘されている [13]。このように、自己記入式の質問紙調査を導入することにより、不登校予備群の生徒を早期に発見することが可能となると考えられる。

しかし、2次予防については中学校教諭や専門家が質問紙調査を実施している場合が多く、心の専門家であるスクールカウンセラーが実施したり、有効性について調査した研究は極めて少ないのが現状である。

そもそも現在の日本のスクールカウンセラー活動は、児童生徒へのカウンセリングや教職員および保護者に対する助言・指導に大方の時間が割かれている。そのため、予防的、発達の側面からの具体的なシステム作りについては未整備な現状がある。しかし、学校場面が日常場面であることを考慮するならば、全生徒の心の発達に対する援助やメンタルヘルスに力を注ぐことが、結果的に学校臨床が抱える問題を軽微化していくことにつながるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、スクールカウンセラーがメンタルヘルス調査を実施し、メンタルヘルス調査の有効性と問題点について調べることを目的とする。また、同時にスクールカウンセラー (以下、S.C) がメンタルヘルス調査を実施することの意義と今後の課題についても検討することとする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

調査者が、S.Cとして勤務しているA県公立中学校の全校生徒173名 (男子94名、女子79名) を対象として実施した。

2. 調査手続き

X年4月、同中学校に勤務するS.Cから委託を受けたという形で、担任教師によるクラス一斉方式で実施された。また、メンタルヘルス上の問題を早期に発見することを目的に行われたため、各生徒の回答を特定する必要があった。そこで、調査の主旨や守秘に関する説明をした上で、同意の得られた生徒に対して出席番号と名前の記入と回答を求めた。

3. 調査内容

質問紙は以下の4尺度を用いて、メンタルヘルス調査を実施した。

(1) Child Rating Scale日本語版: Hightower et al., (1987) の作成したChild Rating Scaleを鈴木 (2009) が日本語訳したものである [14] [15]。「学校への関心」、「友人関係能力」、「規則に従う力」、「不安のなさ」の4つの尺度が各6項目からなり、計24項目から構成されている。「よく思う」～「ほとんどそう思わない」の3件法を用いた。

(2) 基本的信頼感尺度: 谷 (1996) がErikson (1959) の「基本的信頼対基本的不信」を測定するために作成した尺度である [16] [17]。「基本的信頼感」の6項目から、「対人的信頼感」は4項目からなり、計10項目から構成されている。「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」の7件法を用いた。

(3) 自尊感情尺：山本・松井・山成（1982）による自尊感情尺度（Rosenberg, 1965）の日本語版で、10項目からなる [18] [19]。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法を用いた。

(4) 無気力感尺度：下坂（2001）が青年期の無気力感を測定するために作成した尺度である [20]。「自己不明瞭感」の9項目、「他者不信・不満足」の6項目、「疲労感」の4項目からなり、計19項目から構成されている。「まったくあてはまらない」～「かなりあてはまる」の6件法を用いた。

Ⅲ. 結果

1. 因子分析結果

上記の4尺度の各下位因子である計10尺度の平均値と標準偏差を算出し、Table 1に記載した。また、上記の10尺度の因子得点について因子分析（主因子法、ヴァリマックス回転）を行った結果、固有値が1.00以上の因子が3因子抽出された（Table 2）。第1因子は、「学校への関心」、「友人関係能力」、「規則に従う力」から成り、『社会的コンピテンス』（ $\alpha=.70$ ）と命名した。また、第2因子は、「基本的信頼感」、「対人的信頼感」、「不安のなさ」、「自尊感情」から成り、『自己コンピテンス』（ $\alpha=.70$ ）と命名した。第3因子は、「自己不明瞭感」、「他者不信・不満足」、「疲労感」から成り、『無気力感』（ $\alpha=.57$ ）とした。

Table 1 各尺度の記述統計量

| 尺度 | 平均値 | 標準偏差 |
|----------|------|------|
| 学校への関心 | 2.15 | 0.48 |
| 友人関係能力 | 2.34 | 0.37 |
| 規則に従う力 | 2.18 | 0.26 |
| 不安のなさ | 2.40 | 0.43 |
| 基本的信頼感 | 4.39 | 1.20 |
| 対人的信頼感 | 4.74 | 1.02 |
| 自尊感情 | 2.98 | 0.64 |
| 自己不明瞭 | 3.04 | 0.63 |
| 他者不信・不満足 | 3.05 | 0.65 |
| 疲労感 | 3.08 | 1.43 |

Table 2 各尺合成得点の因子分析結果（Varimax回転後の因子分析）

| | I | II | III | 共通性 |
|--------------|-------|-------|-------|-------|
| I. 社会的コンピテンス | | | | |
| 学校への関心 | .796 | .057 | .306 | .730 |
| 友人関係能力 | .717 | .447 | .009 | .714 |
| 対人的信頼感 | .543 | .292 | .243 | .439 |
| 規則に従う力 | .408 | .113 | .177 | .211 |
| II. 自己コンピテンス | | | | |
| 基本的信頼感 | .193 | .723 | .437 | .751 |
| 不安のなさ | .161 | .649 | .225 | .497 |
| 自尊感情 | .331 | .509 | .279 | .446 |
| III. 無気力感 | | | | |
| 疲労感 | -.349 | -.309 | -.652 | .642 |
| 自己不明瞭 | -.123 | -.225 | -.390 | .218 |
| 他者不信・不満足 | -.268 | -.365 | -.378 | .348 |
| 因子寄与 | 1.99 | 1.78 | 1.22 | 4.99 |
| 寄与率 | 19.89 | 17.83 | 12.24 | 49.96 |

2. 学年, 性別による検討

各尺度得点を従属変数、性別と学年別を独立変数として、2要因分散分析を行った (Table 3)。その結果、社会的コンピテンス得点においては女子の方が男子より有意に高く (F (1,167) =6.67)、自己コンピテンス得点においては男子の方が女子より有意に高かった (F (1,167) =7.59)。また、無気力感得点においては、学年間に有意な差が認められた (F (2,166) =4.71)。多重比較 (Tukey HSD法) の結果、1年生が2年生、3年生より有意に低いことが明らかとなった。

3. メンタルヘルス調査の有効性に関する検討

各尺度について平均値±SDを基準として、群分けを行った。社会的コンピテンスは、低群 (以下L群) 7.70点以下、中群 (以下M群) 7.69~11.73点、高群 (以下H群) 11.74点以上の3群に分けた。自己コンピテンスは、L群10.21点以下、M群10.20~14.28点、H群14.27点以上に分けた。

無気力感はL群2.34点以下、M群2.33~3.77点、H群3.78点以上の3群に分けた。社会的コンピテンス、自己コンピテンス、無気力感の各群評定を組み合わせた。その結果、19グループが抽出された。

その後、各クラスの担任教師6名、学年主任3名とS.Cで検討会を実施した。そこで述べられた各生徒の臨床像をもとに各グループの生徒の特徴を記述した (Table 4)。

とくにLLL群においては、その後不登校となったり、発達障害の可能性をもつ生徒が多く、相談室、保健室の来談歴が高い結果となった。

Table 3 各尺度得点 (学年別・性別) と分散分析結果

| | | 1年 | 2年 | 3年 | 全平均 | 学年別 F値 | 性別 F値 | 交互作用 F値 |
|-----------------|-----|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------|----------|------------|
| 社会的コンピテンス 得点 | 男子 | 11.77 (2.20) | 11.92 (2.44) | 12.03 (2.06) | 11.91 (2.21) | 0.68 | 6.67* | 1.45 |
| | 女子 | 13.33 (1.55) | 12.32 (1.78) | 12.48 (1.80) | 12.66 (1.76) | | | |
| | 全平均 | 12.44 (2.09) | 12.14 (2.11) | 12.21 (1.95) | 11.91 (2.04) | | | |
| | | | | | | | | |
| 自己コンピテンス 得点 | 男子 | 10.27 (2.13) | 10.31 (1.91) | 9.77 (1.94) | 10.11 (1.99) | 2.476 | 7.59** | 0.82 |
| | 女子 | 9.97 (1.66) | 9.10 (1.93) | 8.77 (2.18) | 9.26 (1.97) | | | |
| | 全平均 | 10.14 (1.93) | 9.67 (2.00) | 9.37 (2.08) | 9.72 (2.02) | | | |
| | | | | | | | | |
| 無気力感得点 | 男子 | 2.88 (0.56) | 3.01 (0.79) | 3.13 (0.76) | 3.01 (0.71) | 4.71* | 0.52 | 1.31 |
| | 女子 | 2.74 (0.68) | 3.29 (0.66) | 3.23 (0.75) | 3.11 (0.73) | | | |
| | 全平均 | 3.01 (0.61) | 3.11 (0.73) | 3.06 (0.75) | 3.06 (0.72) | | | |
| | | | | | | | | |

** $p < .01$, * $p < .05$

Table4 社会的コンピテンス尺度,自己コンピテンス尺度無気力感尺度を基にした評定群ごとの特徴

| 社会的コンピテンス・ 自己コンピテンス・ 無気力評定 | タイプ名 | 特 徴 |
|----------------------------------|---------|--|
| HHH (6名) | 活発適応型 | 元気で活発な生徒が多い。 |
| HHM (3名) | 自他信頼型 | 周りに合わせながらも自分を出せている生徒が多い。 |
| HMH (8名) | 自信活発型 | 元気が良く、自信もあるため周りを巻き込んでいくタイプが多い。 |
| HMM (16名) | 自己安定型 | 周りとは協調して受け入れられていることにより、安定している生徒。防衛の強い生徒。 |
| HLH (1名) | 他者不信型 | 家庭問題もあり、攻撃性が高い。校則違反を時々行う。 |
| HLM (2名) | 他者拒絶型 | 人との関わりが少なく、自分の世界に入っている生徒が多い。 |
| MHH (6名) | 他者信頼活発型 | 一見安定しているように見えるが、周りの環境に流され不安定となりやすい生徒も含まれている。 |
| MHM (6名) | 他者信頼型 | 活発で、人懐っこい生徒が多い。 |
| MHL (1名) | 他者信頼疲労型 | 周りに気を遣ってしまい、疲れている印象の生徒が多い。 |
| MMH (10名) | 活発型 | 元気で自分を出している印象の生徒が多い。 |
| MMM (73名) | 適応型 | とくに問題を出していない子もいるが、一方で、防衛が強く過剰適応傾向の子や非行傾向の子も含まれている。 |
| MML (9名) | 疲労型 | 家庭においては不安定であるが、大人には気を遣うタイプ。抱えこんでいる印象が強い。 |
| MLM (6名) | 他者不信型 | 家庭基盤が不安定な傾向であったり、両親から偏った愛情を受けている生徒が多い。他者に対しては攻撃的であったり、拒否的傾向。 |
| MLL (3名) | 他者不信疲労型 | 大人しくて、周りから色々言われることが多い。 |
| LHM (1名) | 自信不足型 | 発達障害傾向あり。以前はよくパニックを起こしたり、怒りが止まらず、トラブルになることもあった。 |
| LMM (5名) | 自己不信型 | 自分の気持ちをコントロールできなくて、自信がない生徒が多い。 |
| LML (8名) | 自己不信疲労型 | 先生からみるとタラタラしているというイメージ。知的に低い傾向もあり、天然ボケと思われている生徒も多い。 |
| LLM (3名) | 自他不信型 | 過去に友人関係で自信をもてなくなるような体験をした子が多い。 |
| LLL (10名) | 自他不信疲労型 | 相談室の来談歴がある生徒が多い。また、感情が内にこもる生徒が多い。不登校になった生徒もいる。 |

Ⅲ. 考察

1. 性別差に関する検討

まず、尺度の因子内容について述べると、社会的コンピテンス因子は、「学校への関心」、「友人関係能力」、「規則に従う力」から構成されていた。社会的コンピテンスとは、さまざまな対人的状況において、社会的に承認された方法を用いて効果的な相互交渉を行う等の社会とつながる力であるとされる [21]。本研究においては、中学生における社会的コンピテンスは、学校の規則に従う力や友人関係を築く力、そして学校へ関心を持てる状態であることが示唆された。この社会的コンピテンス因子においては、男子より女子の方が有意に得点が高かった。その背景としては、中学時代の友人関係において、男子と女子とは関係性の相違があることが考えられる。榎本（1999）は、中学校時代の友人関係では男子は遊びを共にする関係が強調される一方、女子においては他者を入れない固く親密な絆を友人との間に築くとして

いる [22]。

とくに女子は、一人であることを拒絶するために自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしているとの指摘もある [23]。一方、男子は友人に左右されることに敏感であり、友人に対してライバル心を抱くこともあるとされる [22]。このように女子においては、学校から友人からはみ出さないように努力している傾向が考えられ、その結果社会的コンピテンスが男子より高かったと推察される。

一方、自己コンピテンス因子は「基本的信頼感」、「不安のなさ」、「自尊感情」から構成されていた。このことから、自己への信頼等のように自己の安定感を示す因子であると考えられる。この自己コンピテンスでは、女子よりも男子の方が有意に高かった。石田 (1990) は、男性性は自尊心と相関関係があるが、女性性は自尊心と無相関関係であると指摘している [24]。

以上の点を鑑みると、男子にとっては、女子よりも他者との関係というよりも、まず自分に自信を持つなどの自己コンピテンスに比重が置かれるのではないだろうか。つまり、人と自分との差異を見つけることにより自己を確立していくため、自己の安定感を示す自己コンピテンスが女子より高いのではないだろうか。また、女子は、男子よりも友人との関係にコミットメントすることや友人と親密な関係を築くことに比重が置かれているため、とすれば周りの環境により自己の安定感も左右される側面があると推測される。

無気力因子に関しては、信頼性が他の尺度より低かったため、今後更に検討が必要である。

2. メンタルヘルス調査の有効性についての検討

本調査の結果では、LLL群においてはその後相談室に来談する生徒が多かったり、発達障害傾向やその不登校となった生徒が分類された。その結果、本尺度がリスクの高い生徒を拾い上げることにおいては有効であった側面が示唆された。一方、MMM群においては問題を有しながらも防衛の強さより、調査の結果に反映されていない生徒も含まれていた。

先行研究においても、不適応状態となる生徒の中には、本人の自覚が乏しいケースが報告されている。とくに、不登校生徒のなかには、過剰適応により不適応状態となっているケースもある [25] [26]。この過剰適応生徒については自分自身の本音に気づけていない点や、本当の自分の感情を認識できていない点の特徴である [27]。その結果、過剰適応生徒は一見学校適応が保たれているように見えながら、その陰でストレスが蓄積されており、学校不適応に至るリスクを抱えていることを自覚していない場合も多い [28] [29]。また、非行傾向生徒においては、外的（社会）適応は不良なのに、内的には不満や苦悩を持っていない場合もある [27]。この背景としては、非行生徒は思春期に経験する学校や家庭、あるいは自分自身との葛藤を悩みとして抱えずに、不適切な行動により表現する点が考えられる [30]。

このように、本研究では問題を抱えていながらも本人の自覚がない場合においては、質問紙調査で拾い上げることが困難となるケースもあることが示唆された。

3. S.Cがメンタルヘルス調査を取ることの意義

本研究より、S.Cがメンタルヘルス調査を行う利点としては、第一に教諭と連携をとり、実際の生徒の様子と調査結果の比較検討ができ、尺度の適性についても判断しやすい点が考えられる。鈴木 (2007) は外部の専門家からメンタルヘルス調査の結果をフィードバックするよりも、S.Cを通してフィードバックする検討会の方が、教師の生徒理解においてもより有効であることを示唆している [31]。また、S.Cがメンタルヘルス調査を実施することの利点としては、普段見逃してしまいがちな生徒に注意を喚起でき、S.Cが検討会を通して、教師と各生徒に対する共通理解を深めることができる点についても示唆している。このように、S.Cがメンタルヘルス調査の結果についての検討会以降も学年会で生徒に対して継続的に話

し合う機会を持つことや、立ち話であっても日常的な学校場面での生徒に対する理解を共有することで、リスクの高い生徒を長期的な視野のもとで支援することが可能になると考えられる。また、調査結果をもとに教諭と先生との間に共通理解や方針を持つことが可能となる点においても意義深い。

一方、臨床活動の観点においても、S.Cがメンタルヘルス調査を実施することにより、問題をもつリスクの高い生徒に気づき、働きかけることが可能となる。例えば、S.Cが掃除の時間や給食の時間等を生徒と共に過ごすなかで、リスクの高い生徒に自然と声をかけることを増やすことにより、相談へと結びつくケースも見られた。後藤・廣岡（2005）は、相談したいことがある生徒でも相談することに対する不安と防衛が働き、相談室に来談できないケースもあるとの指摘もある [34]。リスクの高い生徒が相談したいときに相談できるような環境作りをする上でも、S.Cがメンタルヘルス調査を実施することにより、生徒の心のSOSのサインを受け止め、働きかけることが必要であると考えられる。

4. 今後の課題

質問紙調査法においては、限界点もあるとの指摘もなされている [33]。本研究の結果からも、MMM群において問題を有している生徒が含まれていたことから、とくに防衛が強い生徒や行動化している生徒においては、自己記入式質問紙調査ではありのままの心の状態を察知することが難しい可能性が考えられる。今後は投影法や観察法等の調査方法を併用して実施することにより、重層的に心の状態を把握する必要がある。

引用文献

- [1] Katz e, I. & Graw, A. C. School-Based Mental Health Services: Creating Comprehensive and Culturally Specific programs, *American Journal of Psychiatry*, 162 (4) , p830-831. 2005
- [2] Cowen, E.L. Baby steps toward primary prevention. *American Journal of Community Psychology*, 5,1-22. 1977
- [3] Meyers, J. & Parsons, R. D. Prevention planning in the school system. In J. Hermalin and J.A. Morell (Eds.) , *Prevention planning in mental health* (p111-150) , New bury Park, CA: Sage. 1987
- [4] Mrazek, P. B., & Haggerty, R. J. *Reducing risks for mental disorders: Frontiers for preventive intervention research*, Washington, D.C.: National Academy Press. 1994
- [5] Durlak, J. A. *Successful prevention programs for children and adolescents*. New York: Plenum Press. 1997
- [6] Durlak, J. A. *School-based prevention programs for children and adolescents*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications. 1995
- [7] Cowen, E. L. The wooing of primary prevention. *American Journal of Community Psychology*, 8, p258-284. 1980
- [8] 飯田順子 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連 *学校心理学研究* 第3巻 p3-9. 2003
- [9] 森田洋司 「不登校」現象の社会学 学文社 1991
- [10] 相馬誠一 学校教育相談の領域と限界 高橋史朗（編）*新学力観を生かす学校教育相談* (pp. 50-56) 学事出版 1996
- [11] 河村茂雄 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (1) 学校生活満足度尺度 (中学生用) の作成 *カウンセリング研究* 第32巻 p274-282. 1999
- [12] 大久保智生 青年の学校への適応感とその規定要因：青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 *教育心理学研究* 第53巻 p307-319. 2005
- [13] 粕谷貴志・河村茂雄 学校生活満足度を用いた学校不適応のアセスメント介入の視点—学校生活満足度と欠席行動との関連および学校不適応の臨床像の検討— *カウンセリング研究* 第35巻 p116-123. 2002
- [14] Hightower, A.D. Cowen, E. L., Spinell, A. P., Lotyczewski, B. S., Guare, J.C., Rohrbeck, C. A., & Brown, L.P. *The Child Rating Scale: The development and psychometric refinement of socioemotional self-*

- rating scale for young school children. *School Psychology Review*, 16, p239-255. 1987
- [15] 鈴木美樹江・川瀬正裕 CRS (Child Rating Scale) 日本語版の試み 日本教育心理学会第51回総会発表論文集 p300. 2009
- [16] 谷冬彦 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究 第9巻 p35-44. 1998
- [17] Erikson, E.H. *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & company. 1959
- [18] 山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 第30巻 (1) p64-68. 1982
- [19] Rosenberg, M. *Society and adolescent self-image*. Princeton Univ. Press. 1965
- [20] 下坂 剛 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究 第49巻 (3) p305-313. 2001
- [21] 柴田利男 仲間との対人経験が幼児の社会的コンピテンスに及ぼす影響 教育心理学研究 第43巻 p85-91. 1995
- [22] 榎本淳子 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究 第47巻 p180-190. 1999
- [23] 保坂一巳 中学・高校のスクールカウンセラーのあり方について—私立女子高での経験を振り返って— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要 第15巻 P65-76. 1993
- [24] 石田英子 ジェンダー・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証 心理学研究第64巻 P417-425. 1994
- [25] 河野荘子 青年期事例における時間的展望の現れ方とその変化—不登校を主訴として来談した2事例をもとに— 心理臨床学研究 第21巻 p374-385. 2003
- [26] 田畑洋子 “お前は誰だ!” の答を求めて—ある登校拒否女子校生の自我体験— 心理臨床学研究 第2巻 p6-17. 1985
- [27] 桑山久仁子 外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして— 京都大学大学院教育学研究科紀要 第49巻 p481-493. 2003
- [28] 石津憲一郎・安保英男 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究 第56巻 p23-31. 2008
- [29] 奥野誠一・小林正幸 中学生の心理的ストレスと相互独立性・相互協調性との関連 教育心理学研究 第55巻 p550-559. 2007
- [30] 生島浩 悩みを抱えられない少年たち 日本評論社 1999
- [31] 鈴木美樹江・松本真理子・井手裕子 学校におけるメンタルヘルス支援に関する研究 (2) —スクールカウンセラーによる質問紙調査の活用について—、教育心理学会大会第49回総会発表集 p715. 2007
- [32] 後藤安代・廣岡修一 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第25巻 p77-84. 2005
- [33] 安田節之・渡辺直登 プログラム評価研究の方法 新曜社 2008

鈴木美樹江

愛知東邦大学 学生相談室相談員

愛知県スクールカウンセラー

金城学院大学 学生相談室相談員

金城学院大学 非常勤講師

受理日 平成22年9月30日